

寄稿



礎楚

ネタがない！

国語科 小池 亜希

さて、何を書きましようか…。原稿の依頼を受けてからネタが浮かばず、先延ばしにした結果が今（提出期限をだいぶ過ぎました！）です。担当の皆々様、大変申し訳ございません。そして今もネタが浮かばず、つらつらと紙面をうめています。国語科だからといって、文章を書くのが得意とは限らないのです。

このような原稿を依頼されることはそれなりにあるのですが、毎回ネタに頭を悩ませています。私は現在演劇部の顧問をしています。演劇の大会に行くと「先生が台本を書きました」「部員たちで台本を書きました」という作品がとても多いのです。大会では、基本60分の舞台を作るので、文章量もそれなりに多いのですが…。びっくりです。市立の演劇部も、12月と2月の台本は部員が書きました。皆さん、よく書くネタがでてくるなあ、と感心しきりです。

演劇の台本は少し特殊かもしれませんが、何かしらのネタを見つけて、文章にできる人ってすごいなあ、と思います。以前一緒に働いていた先生は、「担任になったら毎日学級通信をだす」ということを自身に課している方でした。（ちなみに、担任の度に毎回やっているとのこと！）3年間、本当に毎日学級通信が出ました。私も毎日もらって読んでいました。――毎日といえ。私の祖母は毎日、日記をつけています。御年96歳ですが、何歳の時からつけているのか：5年日記が、結構な冊数たまっています。我が祖母ながら、毎日書くネタがあることも続けていることも、すごいなあ、と思っています。

祖母の日記や毎日の学級通信を読むと、日々のちよつとしたことが書くネタになっているんですね。文章を書く、となるとなんとなく身構えてしまうのですが、もっと気楽に書いても良いのかな、と。まあ、まずは日々のちよつとしたネタに気付ける、目を向けられる感性を磨きたいと思います。

「親孝行したいときには親はなし」

国語科 古岩井 忠之

珍しい色合いだったのを気に入って購入して植えた、と言っていたチューリップが今にも花を咲かせようとしていた四年前の四月中旬の夜明け前、父は帰らぬ人となりました。生死の淵をさまよう大手術を二度乗り越え、亡くなる四年半前からは何度も入退院を繰り返し、七〇回以上に及ぶ抗がん剤治療にも弱音一つ吐くことのなかった強い人でした。本当に強すぎる人でした。最後に救急搬送された時も、医師からは「今日か明日が山だろう…」と言われましたが、父はそこから五日間も我々家族にゆつくりとお別れする時間を与えてくれました。ICUでは人工呼吸器が装着されていたため、声を発することはできませんでした。葬儀当日は、満開に咲き誇った桜の花びらを一瞬にして吹き飛ばしてしまような、冷たく激しい雨となりました。さすがは雨男、でも無念の涙だったのかもしれない…。

時まさに「新型コロナウイルス感染拡大の緊急事態宣言」が発令された直後だったこともあり、葬儀をはじめ、様々な場面で「いつもと違う対応」を求められました。ICUでも面会が厳しく制限されましたが、面会をお願いする度に、なぜか中野西高校で教えた生徒たちが次々と応対してくれたのは偶然だったのか、それとも…？「お前に看護師なんて務まるのか？医療職をなめるなよ！」と当時厳しい言葉を浴びせた連中が、「黙って見てろ」と言わんばかりに、てきぱきと処置をこなす姿を見て胸が熱くなりました。

自身の高校時代を振り返ると、父親は仕事の関係で毎日深夜に帰宅していました。私はといえば、お盆と正月三が日以外は休日のない吹奏楽部に所属していたこともあり、父とはほぼすれ違いの生活でした。会話を交わす場面もほとんどなかったように思います。高校卒業後、実家を出てから戻ることはなく、



一緒に過ごすことができた時間が僅かであったことを考えると、あの時にもっと話をしておけばよかったな…と今更ながら思います。また、晩年の介護のサポートなど、自分にやれることはたくさんあったはずなのに…と後悔しきりです。

「親孝行したいときには親はなし」昔からよく聞いていた言葉で、意味もよく分かっていたつもりでした。それなのに自分の思い描く親孝行や恩返しは全くてきませんでした。そんな経験もふまえて、母親にはできる限りのことをしたいと思って今を過ごしています。皆さんには申し訳ないと思いますが、学校の仕事を後回しにしても母親のことを優先して病院に連れて行ったりもしています。

「親が元気なうちに、子どもが親孝行できる時間」は意外と残り少ないものなのです。

最後に頼れるのは「自分」のみ

国語科 内藤 佳史

テレビでスポーツ番組などを見ていると、自分よりもまだずつと若いアスリートが、まるで悟りを開いた僧侶のように立派にインタビューにこたえているので思わず感心してしまうことがあります。



また「優勝できたのは応援してくれた皆さんのおかげです」とか「ファンの皆さんの声援のおかげでゴールを決めることができました」などという言葉で聞くと、とても謙虚な選手だなあと感じます。

自分を支えてくれた人の存在はもちろん大切ですが、自己管理を徹底し、苦しい練習に耐え、そして結果を出したのは、他ならぬ「自分自身のおかげ」ではないかと思うからです。自らが最大限の力を尽くすこと、そして周りに支えてくれる人がいること。それでこそ最高の結果を出すことができるのだと思います。



自分のために努力できるのは自分しかいません。受験、大会、資格、就職、検定など、世の中には「勝ち負け」のつくもの、「合格不合格」のつくものがたくさんあります。これらに立ち向かうとき、最後に頼れるのは自分のみです。どんなに周りが一生懸命になったとしても、当の本人にやる気がなければ、結果を残すのは難しいでしょう。



？教科書定番小説クイズ？

国語科 西澤 由香

教科書には、「羅生門」「故郷」「舞姫」など何十年も掲載され続ける定番小説がある。

石炭をばはや積み果てつ。

この一文は、森鷗外『舞姫』の冒頭である。では、作品のラストの一文をご存じだろうか。

されど我が脳裡に一点の彼を憎むところ今日までも残れりけり。

「石炭は早くも積み終わってしまった」から始まり、「しかし、私の脳裏には彼を憎む心が今も残っている。」までの間に一体どんなストーリーが展開されるのか、気になった方は是非全文を読んでみよう。

さて、ここからはクイズ。次の①～③の一文で始まり、④～⑥の一文で終わる作品の題名は何？また、作者は誰？

①えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧おさえていた。

④そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行った。

ヒント（大正末期から昭和初期の作品。登場人物「私」のみ。場所「果物屋」「丸善」。）

②隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南駢に

補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。

⑤虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、又、元の

叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

ヒント（太平洋戦争中に発表されたデビュー作。登場人物「李徴」「袁慘」。場所「林中の草地」。）

③メロスは激怒した。

⑥勇者は、ひどく赤面した。

ヒント（一九四〇年に発表された、中学の教科書の定番物語。登場人物「メロス」「セリヌンティウス」など。場所「シラクスの市」など。）

授業で扱われるまで待っていただけのものよいのだが、答えが気になる方には『名作うしろ読み』（斎藤美奈子著）という本を紹介したい。古今東西の名作132冊をラスト一文から読み解くという内容で、今回のクイズになっている作品も掲載されている。

私はこの本を「文豪は『お尻』に命を懸けた！」のキャッチコピーに魅かれて購入した。名作の冒頭の一文と言われれば、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」（川端康成『雪国』）とか、「木曽路はすべて山の中である。」（島崎藤村『夜明け前』）とか、いくつか思い浮かぶのだが、ラストの一文はひとつも思い浮かばなかったからだ。それでも、文豪たちはラストの一文に命を懸けたというのだ。では、この文章のラストの一文はどうしよう……。そうだ、名作の一文を借りてしまおう。

「みなさんにおたずねしたいと思います。――君たちは、どう生きるか。」

ちよつと重いなあ。（吉野源三郎『君たちはどう生きるか』）

「神さまがわたしたちすべてに祝福を与えてくださいますように！」

ちよつと優等生すぎるかな。（ディケンズ『クリスマス・キャロル』）

色々悩んでも仕方がないので、よし、この一文で終わりにしよう。

「明日はまた明日の陽が照るのだ。」

（マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』）



探究心

数学科 中澤 徹也

ある日、大学以来の旧友と会食に出かけることになった。なにやら、その友は、某テレビ番組に触発されて、町中華にはまっているとのこと。町中華とは、きちんとした定義があるわけではないが、地元の人たちに親しまれている中華料理をメインとした庶民向けの食堂のこと。彼は「中華屋なのに、とんかつやオムライスを出したりするのがいいんだよ」と魅力を語っていた。そして、彼が事前にネットで調べ、目星を付けていたお店に到着した。そのお店は、閑散とした某駅前にあり、こじんまりしているもののこれぞ中華料理店というたずまいだった。入店するなり「いらっしやいませ〜」とお酒で頬を赤らめた店主が迎えてくれた。席に座り、メニューを見ると、全て本格中華。前菜のキムチだけが、唯一他国のものであった。そして、家族経営とみられる店員さんたちのやりとりは、オール中国語。結局、羽根つき焼餃子も、茹餃子も、エビチリも絶品だった。そして、友人が一言「マチ中華というより、マジ中華だったね」。

今年度、八期生の翼プロジェクトは、善光寺ウオークに始まり、「長野市で外国の方と共生していく」というテーマで、探究的な学びが方向づいた。「マジ中華」が日本の片田舎にも根付いている姿に、私は探究の一つの解をみた気がした。

いきものから学ぶ

理科 片岡 めぐみ

私の家には猫が四匹いる。空気のような存在だ。三匹は家の中を適当に歩き回り、もう一匹：三毛猫(タマ)は、猫が嫌いなので寝室で隔離生活している。タマとの出会いは四年前。保護猫団体から多頭飼育崩壊で六〇匹保護され飼育してほしいとの話があり、収容先へ行った。飼主の手が入らない状態で育った猫は、野生化しており家猫とは目つきが違う。頭を撫でようと手を出せば牙を剥き、爪をたてて猫鉄拳。古傷が残るほどの被害を受けた。その中で私の隣に座り『触って。』と体をよせてきたのがタマ。『この子だ!』と私の直感(あてにならない)により家に連れて帰った、三匹の先住猫が出迎えるや否や家は戦場となった。そして、息子の部屋に隔離されヒトにも敵意をむき出し二年経った。可哀そうだと思ったが暫く檻の中に入れヒトとの距離を少しずつ縮めた。試行錯誤を繰り返し、今では添い寝をするようになった。しかし相変わらず猫嫌い。

タマの生い立ちを想像すると、多頭飼育の環境で餌も満足に与えられず、常に争いの中で生き抜いてきたため、猫Ⅱ敵。幼いころの環境により性格は簡単に変えられない。タマというクセの強い猫に居場所をつくり、時間をかけて複数のヒトが関わったことで互いの距離を縮めることができたのだろう。(と言いたい、人間都合の解釈だと思ってしまおう)タマは自分のペースを変えずに、私たちの行動や思考の変化を仕向けた(こっちが諦めた)。ネコがヒトの心を変える能力をもっているのではないか。(猫ファースト)

本質的に変わらないものを持っている者こそ最強なんだなあ。

タマは周囲のヒトのことなんて考えられないんだから、それこそ最強の幸福な生き物だ。



苦手なこと

理科 住谷 大樹

私の最近の趣味は、ランニングです。趣味といったものの走ることは苦手な部類です。ランニングを始めたきっかけは、妻の父親に10km走らされてからです。何故走らされたかという点、「10kmも走れない奴に娘は渡さない」的なことだと思っています。その後は、ハーフマラソンの大会に半強制的にエントリーしてきました。当時は、大会前にあまり練習をせずに大会に出場していました。二十三年に出場した大会で初めて二時間をきってゴールしたときに、義理の父親から「ようやくお前も家族になれたな」と言われました。結婚して二年程経っていましたが、自己ベストを更新した達成感よりも父親からの言葉の衝撃が大きかったのを今でも覚えています。

二十四年の十一月にもハーフマラソンの大会に出場した時、途中で歩いてしまいました。そのことを情けなく思い、一念発起してフルマラソンにエントリーしました。そこから現在に至るまで、日トレーニングを積んできました。走る前は、とても憂鬱で走りたくないと思いますが、また情けない思いをしたくないと一心で走っております。月間走行距離が200kmをこえていて、僕の考える趣味の範囲からは逸脱しているのですが、走り続けています。

話が長くなりましたが、何を皆さんに伝えたいかというと、苦手なことこそやり続けることが大事だと思っています。部活動や勉強においても苦手なことはあると思いますが、ほったらかしにしても状況が好転することはありません。ならいっそ苦手なことにも全力で取り組んでみましょう。たとえその結果が報われなくても、やってきたことは自信につながると 생각합니다。まずは、がむしゃらに取り組みましょう。

時間の使い方が未来をつくる

保健体育科 青木 孝文

「80歳まで生きるとしたら、人生は4000週間」。そう聞くと、私たちの時間がいかに限られているかに気づきます。年齢で換算すると「中学校卒業まで780週間、高校卒業まで936週間が終了」ということになります。

「どうして時間はこんなにも早く過ぎるのだろうか」と感じたことはありませんか？私は学生時代、そのような思いを抱えていました。

時間は誰にとっても平等です。ただ、その時間をどう使うかで、得られるものは大きく変わります。この視点は学生時代だけでなく、大人になってからも大切です。例えば、テスト前の夜、「もう少し早く始めておけば」と思いながら、慌てて参考書を開いた経験はありませんか？私はそのように後悔を繰り返しましたが、少しずつ準備を進めることで結果が変わることを学びました。

限られた時間を有意義に使うには、まず「何を大切にしたいか」を考えることが重要です。勉強、部活動、趣味、友達との時間など、すべてが大切だからこそ、優先順位をつけて計画的に行動することが求められます。例えば、毎日5分でも予習や復習に時間を割くことで、試験前の負担を大幅に減らせます。もちろん、計画通りにいかないこともあります。それでも努力を続ければ、成長を実感できる瞬間が訪れます。

今は「将来の自分の土台」をつくる時です。だからこそ、「自分のためになる選択」を心がけてみてください。短い5分を使って本を読んだり、授業でわからなかった部分を調べたりすることが、その一歩となります。小さな積み重ねが未来の大きな力となります。

「時間をどう使うか」を意識し、自分の成長を楽しんでください。今日の小さな一歩が、未来のあなたをつくります。どうか、その一歩を踏み出してみてください。



ターニングポイント

保健体育科 丸山 みずき

高校生活の中には、進路選択や将来のことについて悩む瞬間が増えてきます。進学が就職課、どんな仕事をしたのか、どんな自分になりたいのか。未来への不安や期待が交差する中で、どんな選択をするべきかを考えることは、誰にとっても大きな課題です。しかし、未来を考えることは、決して一度きりの決断ではありません。自分の未来をしっかりと見据え、少しずつその道を作っていくことが大切です。

●進路は一度きりではない●

進路を決めるとき、多くの人が「これが最後の選択だ」と感じることはありません。私も高校生の頃はそう思っていました。しかし、実際には人生における選択は一度きりではありません。大学に進学した後や就職した後でも、キャリアチェンジや転職、再学習など、何度でも新しい選択肢を試すことができます。進路を決めることにプレッシャーを感じるかもしれませんが、それは一つのスタート地点に過ぎません。重要なのは、今自分がどんな方向に進みたいのかを考え、その道を選ぶことです。もし途中で進む道を変えなくなったら、また新しい道を歩めばよいのです。そのためには、柔軟な考え方と、どんな選択をしても後悔しないように自分の決断に責任を持つことも大切です。

つまり、人生には多数のターニングポイントがあり、決して一度きりの選択ではありません。自分を知り、大きな夢を描き、小さなステップを踏みながら、自分自身の未来は確実に形作られていきます。焦らずに、自分だけの人生を楽しんでほしいです。

便利さの中で・・・

外国語 小宮山 裕美子

2019年に、突然発生した新型コロナウイルスが全世界を混乱に陥れた。マスク生活を余儀なくされ、突然の一斉休校に対応するため、生徒一人一台パソコンが実現した。そしてようやく、長かったコロナ禍が終わり、学校現場も通常に戻った。しかし、すべてが元通りになったわけでもない。一人一台パソコンの存在が学校の在り方を大きく変えた。

教材のデジタル化により、紙の使用量は激減した。教科書に、QRコードが表示され、簡単に、動画や音声にアクセスできることは紙の教科書との大きな違いだ。板書は、手書きで写しとるものではなく、写真で撮影するものへと変わり、授業中もシャッター音が響く。重い紙の辞書はもちろんのこと、電子辞書さえ姿を消した。学校内どこでも、インターネットに接続可能である。

これだけ恵まれた学習環境が整っているにも関わらず、生徒の学力が向上したのか？残念ながら、現実はそのなにごくはないようだ。

タブレットは無限の可能性を秘めている。広く情報を集めたり、オンラインで海外の人と交流できたり、自分の現在の学力に合わせて有名講師の授業が視聴できたり。反面、いつでも場所を選ばずYouTubeを見たり漫画を読んだり、学校の課題を要領よく終えることもできる。目的に合わせて、うまく使いこなす生徒と安易な方向に流されてしまう生徒との間の学力格差は拡大している。教員側もどう活用し、どこまで取り締まるか毎日頭を悩ませている。便利な時代だからこそ、高い目標を持ち、多くの選択肢の中から、正しい選択をできる力が求められている。



『そして再び』

社会科 松倉 志

平成17年12月3日、時間は午後3時を回ろうとしていた。前日からの寒波襲来で飯田市の県営飯田弓道場は朝から雪が舞い、午後になると吹雪となっていた。風が強く、雪が射場に吹き込む中、この日最後となる試合の選手たちが入場してくる。私はそれを観覧席から見つめる。第一射場に長野商業、第二射場に松本深志、第24回全国高等学校選抜弓道大会への出場をかけた長野県予選の男子団体決勝戦が今まさに始まろうとしていた。私が監督を務める松本深志チームは、この日の午前中に行われた予選を24射13中で辛くも切り抜け、上位8チーム、各試合12射で競われる決勝トーナメントに進出、トーナメント1回戦で飯田工業を8-5で退けると準々決勝でも快勝して決勝へと駒を進めていた。「始め」の号令がかかり選手が射位に進んで試合が始まった。ほぼ同時に両チームの1番の選手が弓を打ち起こす。松本深志の1番Y、実はこの日の予選で苦しんだ。3人1チームで四矢×2回の計24射で行われる予選、Yは2回目に4射0中で2・3番の活躍に救われていた。この時も後の二人の連続の中で息を吹き返し2射目は的中、それにしても1番の1本目が中らないのはチームとしては苦しい。それでも2番「の前半2連中で松本深志は3人6射が終わった折り返し時点で合計4中、長野商業の3中を一本上回り後半戦へ。対戦相手の長野商業、実は一番対戦したくない相手だった。午前中の予選を16中で突破し、トーナメント1回戦9中、準々決勝も9中と安定した高的中で決勝に勝ち上がってきた。何よりもチームに勢いとオーラがある。間違はなく優勝候補の筆頭だ。私はトーナメントで対戦せぬようお願い、幸いにも抽選

で別組となった。しかしというか、やはりというか、決勝でぶつかることとなった。相手が他のチームであれば、私は不安なく試合を眺めることができたに違いない。予選でいかに的中数があろうとも、トーナメントにはトーナメントの戦い方がある。はばかりながら新チームに切り替わったこの約半年間、私はその戦い方を技術面、メンタル面を含め、ありとあらゆる稽古の場面で徹底してきた。準決勝の対戦相手の松代(予選を17中でトップ通過)にも不安を抱くことは全くなかった。100パーセント負けることはないと思っていた。事実、松代を寄せ付けることなく大差で下しトーナメント決勝へ。しかし、相手が長野商業となると話は違う。決勝戦が始まる前に長野商業の選手のアップを見る。縦横十文字の規矩がしっかり構成された力みのない美しい射形、さすがは監督のH氏が手塩にかけた選手たちだ。

後半の3射目に突入し松本深志が若干先行して試合が進む。パーンという乾いた的中音に間髪を入れず「よし」、応援の声が両チームの応援席から響き渡る。3射目、松本深志は3人全員が詰めて横皆中、一方、長野商業も譲らず3連中して松本深志が一本リードのまま最後の4射目へ。4射目、深志の1番Yが〇、追いかける長商1番も〇。深志2番「は×、追いかける長商2番が〇、とうとう追いつかれた。深志3番「は最後の1本を慌てることなく詰め、本座の椅子に戻り長商3番の結果を待つ。長野商業の3番は抜群の安定感、落ち着いた射の運行から鋭い離れ、見事4射皆中で締めくくった。皆中を讃える拍手が響き渡る。決勝戦は両チーム12射9中の同中で、戦いは延長の一本競射(サッカーに例えるとPK戦)に突入することとなった。一本競射の1本目、吹雪はより一層激しさを増している。否応なく会場全体の空気が張り詰める。深志がやや先行して行射に入る。ここで1番Yが×、やってしまった、予選か



らー本目がなかなかの入らない不調がここで出る。長商1番が〇で1本リード。深志2番「X」。まずい、絶体絶命だ。しかし、長商2番はチャンスに動揺したか矢は的を逸れた。続く長商3番まさかのXで計1中。ここで松本深志3番「」の起死回生の的中で11の同中に。首の皮一枚でつながった。

松本深志3番の「」、必ずしも順調に選手経歴をつんできたわけではない。1番Y、2番Iはこの年の春、2年生ながらレギュラーポジションをつかみ、前年度3月に全国選抜ベスト8となった3年生3人と5人立のチームを組んで県大会3位となり、北信越大会への出場経験があった。それに対し3番の「」は、3年生引退後にトップチームの大落(3番、アンカーポジション)を任せられた手だった。Iはその一途な性格と不器用さからYや2番Iに遅れをとったものの、こと練習量に関しては一番の矢数を誇る選手であった。1年生のとき、通常の放課後練習が終わった後も完全下校の7:00を大きく超えて隠れて道場に残り、夜中まで弓を引いていたことが何回もあった。これを知った私は彼を呼びつけて叱りつけた。しかし彼は、「自主練習をすることの何が悪いのか」と私に食ってかかってきた。そのときの喰いつくような大きな目が今でも忘れられない。2年生の新人戦県大会を前にしたローカル大会で、彼は皆中のかかった4射目を6時(的の真下)に外した。あと一本で皆中という緊張する場面、凡庸な選手は射が小さくなり矢を6時に落とす。そんな典型的な失敗をした彼に、私は4本目を「12時に捨てる」ことを求めた。大落のポジションはチームの最後の一本1留め矢を放つことになる。その重要な1本、しかも皆中がかかった一本で「12時に捨てる」勇気を持てるかどうかの射手の真価を決めるといって良い。10月の新人戦県大会団体戦2回戦で、Iは皆中のかかった最後の留め矢をもの見事に12時(的の真上)に捨てた(意図的に外した)。結果団

体戦3位に終わったが、彼は私が求めたことを理解して、勇気を持って留め矢を「12時に捨てる」たのだ。そして全国大会出場のかかったこの一番の絶体絶命のピンチでチームを救った。

一本競射の2本目、両チームとも譲らず今度は両チーム全員が的中して3でまたしても同中に。会場はため息に包まれた。一本競射の3本目、例によって松本深志が若干先行。1番Y〇、長商1番〇、2番「」〇、長商2番Xで深志一本のリード。3番Iが弓を打ち起こす。勝負を決めるこの一本、十分な会、そして離れ、放たれた矢は的心に吸い込まれ軽やかな的中音を観客席に響かせた。会場を揺るがす「よし」の声、この瞬間松本深志の優勝が決まった。表情を崩すことなく本座の椅子に戻る我が松本深志の選手たち。長野商業の3番が見事な射で留め矢を的に叩き込んで締める。的中の確認が行われ、審判・進行係が「3-2、松本深志高校の優勝」と宣言、定めを通り選手たちが退場してトーナメント決勝戦が終わった。

弓道の監督は試合中には全く無用な存在だ。射場内の選手に指示を出したり、声をかけることは禁止されている。もどかしい気持ちを押さえ、見守ることしか監督にはできない。監督として私がやるべきことは、この試合に臨む前にすべて終わっていた。私は選手達を信じ、選手達を伸びやかに走らせてやろうと決めて送り出した。そして、それは監督である私自身の「拘る心の解放」でもあった。

翌年3月、福岡県博多の森弓道場で開催された第24回全国高等学校選抜弓道大会で、松本深志は予選を12射皆中、出場50チーム中のトップで通過して決勝トーナメントに進出した。決勝トーナメント1回戦で静岡県代表の森高校を下すと、前年の23回大会で全国選抜大会への初出場を果たした先輩に続き、



2年連続で全国ベスト8に勝ち上がった。しかし、続く準決勝ではこの大会で優勝した山口県代表岩国工業高校に僅差で敗れ、残念ながら目標とした全国制覇は叶わなかった。

あれから、もう18年近くの歳月が流れようとしている。私の勤務する学校は4回替わり、弓道段位も2段階上がった。市立長野では、中学弓道部員に2度も全国大会に連れて行ってもらってもいる。それでもなお、日々弓道場で高校生と弓を引く時に最も鮮明に思い出されるのは、この時の県営飯田弓道場での光景だ。どんなに辛く嫌なことがあったとしても、たった一つの幸せなことがあれば人は頑張り続けることができるといわれている。この時の私の経験は、今までもこれから私を支え続けてくれることになるに違いない。素晴らしい経験をさせてくれた高校生諸君に感謝！そして再び、あの舞台へ！！

寄稿

三年四組 金子 陽太

みなさん、こんにちは！ 気がつけば、あつという間に三年間が過ぎてしまいましたね。最初にクラスに足を踏み入れた時、まさかこんなにも濃密でユニークな時間を過ごすことになるとは思ってもみませんでした！最初の頃は、みんなの顔と名前が一致なくて、必死に覚えようとしたことを今でも覚えています。その頃の私は、まるで新しいゲームを始めたばかりのプレイヤーのようで、レベルアップするごとに少しずつ「このクラスの一員」として成長していった気がします。もちろん、最初は緊張していたし、いろいろな意味で怖かったですけど、みんなのおかげで次第に心が軽くなり、毎日のように笑いながら過ごせ

るようになりました。テストや課題で泣きそうな時も、みんながそばにいてくれて支えてくれたことがどれだけ大きかったか、言葉では言い尽くせません。みんなの個性に触れて、改めて「人って本当に面白いな」と実感しました。毎日、違った色のカラフルなキャラクターが集まって、クラスがまるで小さな宇宙のようだった。誰かが面白いことを言えば、クラス中で笑いが溢れ、時には議論が白熱して、でも最終的には「そうだね！」とみんなで納得している。そんな場面が日常茶飯事で、まるでコメディ映画のような時間が流れていました。もちろん、完璧なクラスなんてなかったし、ぶつかり合ったこともありましたが、でも、それもまた私たちを成長させた重要なピースだったんだと思います。何度も「なんでこんなことをやってるんだろう？」と思ったけど、クラスみんながどんな小さなことであっても支え合ってきたからこそ、どんな壁も乗り越えられたんだと今振り返ると心から感じます。三年の間に、私が学んだことはただの勉強だけじゃなくて、「どうやって人と関わるか」「どうやって自分を表現するか」など、社会で生きていくために本当に大切なことばかりでした。そして、私にとって何より大きな宝物は、クラスメートみんなと過ごした時間です。今、こうして振り返ると、三年間の思い出がまるで映画のワンシーンみたいに脳裏に浮かびます。その一つ一つのシーンが、私の中で色あせることなく輝き続けているのは、間違いなくみんなのおかげです。特に、あの時の「どうしてもテスト勉強が終わらない！」という叫び声や、「明日が発表日なのに準備が間に合わない！」という焦りの中で、みんなで支え合い、励まし合った瞬間が今でも鮮明に思い出されます。最後に、クラスの皆さんへ感謝の気持ちを伝えたいです。本当にありがとう！どんな時も、みんなのおかげで楽しい思い出ができたし、みんなの存在が私の三年間を特別なものにしてくれました。これからそれぞれの道で輝き続けてください！そして、またいつか、どこかで笑顔で再会できることを楽しみにしています。 それでは、またね！

